

been frequently confused with *H. javanica* Thunb. However, the former has smaller leaf blades (0.7–3 cm long and wide), shorter petioles (generally 0.7–2 cm, rarely up to 5 cm long) and stems and petioles densely clothed with divergently crisped hairs. In the latter, leaf blades are 2.5–7 cm long, peti-

oles are 3–7 cm long in lower leaves, 0.7–3 cm long in upper ones, stems and petioles are glabrous or sparsely clothed with depressed short hairs. They seems to be adequate to be treated as distinct species.

(東京都中野区 [redacted])

ヤエヤマヤマボウシについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Cornus kousa* Buergeri var. *yaeyamensis* Hatus.

琉球、八重山群島の石垣島と西表島にはヤマボウシの仲間が生育している。これを初島住彦 (1971) はヤマボウシの変種として区別し、ヤエヤマヤマボウシ *Cornus kousa* Buergeri var. *yaeyamensis* Hatus. と名づけ、基本種のヤマボウシ var. *kousa* の分布は北海道から九州の屋久島までであるとした。同氏は後に *Cornus yaeyamensis* (Hatus.) Hatus. として種の位置にあげている。しかし、原寛 (1989) は平凡社の日本の野生植物で、八重山群島のものもヤマボウシとして扱っている。原氏の見解は、1948年にこの類を研究した時から変わっていない。ところが、島袋敬一 (1990) は琉球のものはヤマボウシと異なり、中国中部、南部に分布する *Cornus hongkongensis* Hemsley と同じものであるとした。これは初島が沖縄植物目録第3 (1977) でそのように扱ったのを継承したのである。このように様々な見解があるので、どれが正しいか検討する必要がある。

ヤマボウシ、ヤエヤマヤマボウシともに葉は紙質で表面は光沢がなく、短い毛が生えるか無毛であるが、*Cornus hongkongensis* は葉が革質で厚く、表面は光沢があり無毛であり、全く別のものなので、これは論議から除外しなければならない。ヤエヤマヤマボウシは初島が指摘しているように、ヤマボウシからは幾つかの形質で異なる。同氏が差異としてあげているのは、葉が楕円形、葉柄は長く、総包葉はへら形で小さく、花床は上部に白毛を密生するとしている。葉の形や総包葉の形は変化があり、特徴として取りあげられないが、葉柄の長いことと、花床に白毛が目立つこと

は、ヤマボウシとは明瞭に異なる。分布も離れているし、ヤマボウシと異なるとするのは当然である。しかし、この形質は台湾、中国大陆に分布する *C. kousa* Buergeri var. *chinensis* Osborn (*Benthamia japonica* (Siebold & Zucc.) H. Hara var. *chinensis* (Osborn) H. Hara) と同じである。したがってヤエヤマヤマボウシは台湾、中国のものと同じものとして扱うべきである。

ヤマボウシとヤエヤマヤマボウシとは上記のような差異が見られる以外に、前者の葉は無毛か僅かに毛があり、葯は黄色であるが、後者の葉の表面は多数の毛が生えていて、葯は標本で見ると黒色である。このように種々の差異があるので、それぞれ変種関係とするより、別種として扱うのが妥当だと思う。ヤエヤマヤマボウシに該当する種名として最も早いのは *Cynoxylon sinense* Nakai である。これを *Benthamia* に移した学名が使われることになる。ヤエヤマヤマボウシは琉球南部、台湾、中国大陆に分布する。ヤマボウシは本州、四国、九州、朝鮮に分布し中国には分布しない。

広義の *Cornus* L. を幾つかの属に分割することは賛成であるが、人によって見解が異なり問題がある。ヤマボウシ属は原 (1948) が詳細に論じているので、論議はそこに譲り、*Benthamia* Spach を使用する。中国植物誌ではハナミズキを含む北アメリカのものと、アジアのものとは別属として扱い、アジアのものに *Dendrobenthamia* Hutch. を使っている。しかし、子房が果期に離生しているか癒着するかの違いは属の区別とはなしえないと

する原氏の見解が妥当だと思う。

The plants treated as *Benthamidia japonica* (Siebold & Zucc.) H.Hara var. *chinensis* (Osborn) H.Hara should be separated as a distinct species, *B. sinensis* (Nakai) Yamazaki. They are distinguished as follows:

A. Disk of flower glabrous, anthers yellow, leaves glabrous or sparsely pilose on upper surface, petioles 2–5 mm long

..... *B. japonica*

A. Disk of flower hirsute, anthers blackish, leaves pilose on upper surface, petioles 3–10 mm long

..... *B. sinensis*

***Benthamidia sinensis* (Nakai) Yamazaki, comb. nov.**

Cornus kousa Buerg. var. *chinensis* Osborn in Gard. Chron. ser. 3, 72: 310 (1922).

Cynoxylon sinense Nakai in J. Jpn. Bot. 15: 741 (1939).

Benthamidia japonica (Siebold & Zucc.) H.Hara var. *chinensis* (Osborn) H.Hara in J. Arn. Arb. 29: 114 (1948).

Cynoxylon pseudokousa Pojark. in Notul. Syst. Bot. Nom. Kom. Acad. Sci. URSS 12: 193 (1950).

Dendrobenthamia japonica (DC.) Fang var. *chinensis* (Osborn) Fang in Act. Phytotax. Sin. 2: 105 (1953).

Cornus kousa Buerg. var. *yaeyamensis* Hatus., Fl. Ryukyus: 457 (1971), nom. semi nud.

Cornus hongkongensis auct. non Hemsley: Shimabuku, Check List of Vascular Flora of the Ryukyus: 327 (1990).

Cornus yaeyamensis (Hatus.) Hatus. in Hatus. & Amano, Fl. Ryukyus, ed. 2, rev. ed.: 160 (1994), nom. nud.

Distribution. S Ryukyu (Is. Ishigaki, Is. Iriomote), C to S China (incl. Taiwan).

(東京都中野区 [redacted])

タイワンオガタマについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Michelia formosana* (Kaneh.) Masam.

タイワンオガタマは多くはオガタマノキ *M. compressa* (Maxim.) Sargent と同じものとされるか、その葉の細い変種 *M. compressa* var. *formosana* Kaneh. として扱われている。タイワンオガタマは八重山群島から台湾に分布する。最近、八重山群島の与那国島の生品を見る機会があったが、本州のオガタマノキとはかなり異なることがわかった。タイワンオガタマの葉は狭長楕円形か倒披針形で先はやや鈍く、生品の時は表面の脈は殆ど目立たない。また花卉は披針形、黄白色でやや柔らかい (Fig. 1, a)。オガタマノキの葉は楕円形で先は尖り、生品の時は表面の脈は凹んでいる。花卉は長楕円形でやや厚く、黄白色であるが、下部は赤みを帯びる (Fig. 1, b)。(写真の a と b とは縮尺が異なるので大きさの比較はできない)。葉の脈の様子は標本にするとわからなくなるが、上に述べたような色々な差異があるので、別々の種類として扱

うのが妥当だと思う。Merrill はフィリピンの *M. cumingii* (Merr.) Merr. & Rolfe (現在は *M. philippinensis* (Parment) Dandy) は日本や台湾の *M. compressa* とよく似ていて、恐らく同じ種類だろうと述べている (Enum. Philippine Fl. Pl. 2: 153, 1923)。*M. philippinensis* は若枝、葉柄、葉の裏面脈上に赤褐色の毛が密生しているのが普通である。しかし毛の生え方には変異があり、殆ど毛の無いものもある。葉は披針形で細く、毛の無い個体はタイワンオガタマに良く似ている。しかし、*M. philippinensis* は乾燥標本で葉の両面に細かな網目模様が顕著であり、花は小さく、花卉の長さ 0.8–1 cm である。花の色はわからない。タイワンオガタマは葉の両面の網目模様は大きく、花卉は長さ 1.5–2 cm なので、別種として扱うべきものであろう。学名は *Michelia formosana* (Kaneh.) Masam. & Suzuki となる。